「新川盛政駿河下向記」の史料的研究

―中庄新川家文書研究会　報告一―

鶴崎裕雄

*キーワード
慶長期紀行文・駿河大御所政治・和泉国土豪・新川盛政・和漢聯句

一　中庄新川家文書と新川盛政

本稿で取り上げる「新川盛政駿河下向記」は中庄新川家文書の一つである。中庄新川家文書は、江戸時代には和泉国中庄（大阪府泉佐野市中庄）の在地代官を勤め、昭和初期まで大地主であった中庄新川家に伝来するおよそ二千五百点に及ぶ文書群で、[1] 平成二三年以来、大利直美・近藤孝敏・鶴崎裕雄・山村規子が国文学研究資料館の文献調査を続けている。[2] この調査を機会に「中庄新川家文書研究会」を組織した。このメンバーによる新川家文書や新川盛政に関する論文や口頭発表を挙げると、研究会組織以前も含め、次の通りである。[3]

①近藤（論文発表）「貝塚寺内の成立過程について―「貝塚寺内基立書」の史料批判を通じて―」大沢研一・仁木宏編『寺内町の研究―地域の中の寺内町』法蔵館刊　平成一〇年一〇月。

②近藤（口頭発表）「中世末～近世初頭の和泉国新川氏―中近世移行期の「地侍」の存在形態―」戦国織豊期研究会　於大阪府泉佐野市　泉佐野市民ホール　平成一四年七月。

③近藤（論文発表）「中世末～近世初頭の「中庄新川文書」」『泉佐野市史研究』第九号　平成一五年三月。

④鶴崎（口頭発表）「歌枕と紀行―近世初頭の武士（国人衆）への王朝文学の流布と継承」於国文学研究資料館　平成二〇年六月。

⑤大利（口頭発表）「堺連歌と古今伝授―泉州地侍との交流―」戦国織豊期研究会　於滋賀県長浜市　長浜城歴史博物館　平成二〇年七月。

⑥近藤（口頭発表）「近世初頭の卜半家・新川一門―近世寺内領主権の確立と大御所家康の側近」同右。

⑦鶴崎（口頭発表）「「新川盛政駿河下向記」の政治的意味」同右。

⑧山村・大利（論文発表）「「難波草紙」再考」鶴崎編『地域文化の歴史を

往く―古代・中世から近世へ―』和泉書院刊 平成二四年八月。

⑨近藤（口頭発表）「近世初頭の小堀家と泉州領代官新川家―中庄新川家の文化的側面を中心に―」藝能史研究会例会 於同志社大学 平成二六年八月。

⑩鶴﨑（口頭発表）「慶長文化論―中庄新川家の文化的側面を中心に―」藝能史研究会例会 於同志社大学 平成二六年一一月。

中庄新川家文書の新川氏は、平安時代の河内国長野荘開発領主三善氏の流れを汲むという。[4] 鎌倉時代には紀伊国へ移住し、南北朝時代の初頭、三善盛清（もりきよ）が南朝方として和泉国に攻め入り、室町時代、日根郡に本拠を構え、慶長年間、盛喜（もりよし）・盛政の代より「新川」と改称した（「配数字類」）。この新川一族は貝塚御坊願泉寺の卜半（ぼくはん）家や日根郡の多賀氏・日根野氏などと養子や婚姻の姻戚関係を結び、在地勢力を拡張した。天正一三年（一五八五）秀吉の紀州攻め以後、泉南地方が羽柴（豊臣）秀長の領国となると、盛政・盛明の代には秀長の家臣小堀正次・政一（遠州）に仕えた。その後、天明八年（一七八八）小堀家改易以降は無役の郷士として中庄数か村の庄屋を統括する在地代官を務め、明治維新を迎えた。

「新川盛政駿河下向記」の著者、新川盛政は永禄九年（一五六六）の誕生である。幼少期は泉南・紀北地方の土豪の子弟の例にならって根来寺に入って仏法を修め、教養を積んだ。前に挙げた山村・大利の翻刻「難波草紙」などは、「三慶」や「三十郎盛政」という署名から、この「難波草紙」という書物が盛政に深く関わったことが推測され、若い頃からの知識や教養の豊かさが伺われる。盛政は天正一二年（一五八四）秀吉の小牧長久手出陣の留守を突いた根来雑賀一揆の和泉侵攻で初陣を務めた。翌一三年、秀吉の紀州攻め後、羽柴秀長に出仕した。天正一六年頃より父盛喜とともに中庄の土地集積を開始し、貝塚御坊の卜半斎らと連携し、泉南地域に勢力を伸張した。慶長初年頃より小堀正次に重用され、慶長五年（一六〇〇）の関ケ原合戦にも従軍した。慶長一四年頃より堺南宗寺の沢庵宗彭の許に参禅している。慶長一六年、ここに取り上げる「盛政駿河下向記」の駿河への旅を行った。元和元年（一六一九）以前に隠居し、元和四年には大著「配数事類」（全一二巻）を著述した。没年は元和八年、五七歳であった。盛政の伝記は、中庄新川家文書の一つ、嫡男の盛明著「新川宮内少輔盛政伝」に詳しい。

なお沢庵宗彭については寛永六年（一六二九）の紫衣事件以前の史料はあまり知られていないが、中庄新川家文書には紫衣事件以前の沢庵関係の文書が多く、目下、近藤が調査研究を続けている。また、つい最近、広田浩治氏により「新川盛政あて沢庵宗彭等書状」の史料紹介がなされた。[5]

二　慶長一五年貝塚寺内町における相論

ここで「新川盛政駿河下向記」の背景となった慶長一五年（一六一〇）の和泉国貝塚寺内町の相論について見ることにしよう。「新川盛政駿河下向記」の冒頭、

和泉国貝塚と云所にくせち（口説）のいてきて事すますなりしかは、（駿河）するか
のさた（沙汰）に及びて下侍とて……

とある「くせち」（口説）とは、この時の相論[6]である。慶長一五年四月、貝塚御坊願泉寺の卜半二代了閑（新川石見）の苛政に対して寺内町の住民ら三二名が連署して公訴、というより駿河の大御所徳川家康の許で訴訟となった。一五条からなる一つ書の連署の訴訟（「卜半文書」）と石見の返答書（「並河記録」）である。[7]この時の願泉寺二代目の卜半了閑は新川一門の中心で、盛政とは従兄弟に当たる。まず一五条からなる連署状を見よう。

乍レ恐申上候事

寺内□（欠失）

一、今度石見殿之儀言上申候事□（欠失）之儀ニ御座候へ共、余ニ御さいはん悪□（欠失）恐仕、申上候供事ニ候

一、寺内屋敷の地子百八拾大石四斗九升八合か

一、おなしく家数百六家ハ地子なし、但是者石見殿しんるい、家来、出入之衆

一、寺内ニ御座候荒やしきひらき、田畠ニ被レ成候分、高卅弐石御座候事

一、昔より貝塚之御堂ニ付申候仏供田八拾石四斗八升弐合御座候、先年浅野弾正（長政）殿寺内御検地被レ成候刻、右之ふく田（仏供田）何も卜半御帳あい候も不レ存候、故于レ今寺内之者とも不審仕候事

（中略）

一、理不尽成儀被ニ申懸一候町人家数多被ニ打破一候、此段具ニ紙面ニのせ申上度御座候へ共、各々御理多候間、先々如レ此候

一、右条々其時々言上いたし度候へ共武家のきうめい（糾明）よりも猶あら（荒）けなく当座ニめいわくさせ被レ申間、余ニおそろしく存知、扨々今まて延引仕候、只今申上候儀、少も相違無ニ御座一候、御不審ニ御座候ハヽ罷出可ニ申上一候、仍如レ件

慶長十五年卯月十四日

彦左衛門　七右衛門
甚　七　源兵へ
弥左衛門　新兵へ（以下略）

（「卜半文書」）

こうした新川一門の「理不尽なる」行動に対して寺内の住民は抵抗できなかった。「武家のきうめいよりも猶あらけなく当座ニめいわくさせ被レ申間、余ニおそろしく存知」る故であった。願泉寺側も訴訟に対抗した。

右御返答書

一、御門跡様紀州鷺森へ御座候節、法衆紀伊国路次筋　山中辺、御門跡様へ御参詣之衆打はき山たちを仕候故往還不自由之事

一、泉州佐野村ニ新城拵、根来之坊被レ居候て是も毎日路次筋ニて山たち仕、御参衆及ニ迷惑一申儀無レ隠候

（中略）

一、羽柴美濃守(秀長)様御代ニ被レ成御検地候時、御堂仏供田悉すたり申候、寺内廻ニて我等親ト半才覚仕上ニて少田畠被レ下候事無二其隠一候、併ヶ様之儀を様子不レ存候而申上候哉之事

一、右之以後、浅野弾正(長政)殿泉州御検地付、為二細御奉行頭一被レ成御越候而御検地之時寺内田畠以下悉御とり被レ成俱、是ト半太閤様江御侘言申上候事

(中略)

一、大御所様御朱印頂戴仕候へ共、其礼銭も寺内よりは少も出し不レ申候間、諸事ヶ様之儀候へとも御分別可レ有候事、以上

(「並河記録」)

二ヶ月後、慶長一五年六月二六日、徳川家康より貝塚寺内に諸役免許の直書が下された。

「(包紙)権現様御黒印之写　泉州貝塚　ト　半」

和泉国貝塚本願寺下ト半寺内諸役令二免許一之処、如レ件

慶長拾五年六月廿六日　御黒印

(「ト半文書」)

さらに同年八月八日、同二〇日、片桐且元よりト半了閑の許に貝塚寺内諸役免許状が下付された。先の家康の黒印の直書は大坂の秀頼も認めるものである。

以上

和泉国貝塚本願寺下ト半寺内之儀、今度諸役御免許之御黒印被二成下一候、然者先年高麗御陣以来舟役之儀、従二大坂一被二仰付一候得共、右之趣申上候へハ、自今以後被レ成二御赦免一旨被二仰出一候条、向後誰々何々用申候共、以二此墨付一理可レ被レ申候、為レ其如レ此候、己上

慶長拾五　八月八日　　片桐東市正

貝塚寺内　　且元（花押）

ト半老

(以下略)　　(「ト半文書」)

己上

先度者貝塚ト半ニ御状相届申候、先々貝塚之儀笑止ニ存候処、上様被二聞召一諸役御免許之御黒印頂戴仕由、末代迄忝仕合ニ候、然ハ舟役之儀近年被二仰付一候へ共、則秀頼様へ申上、御赦免之墨付我等遣申候条、可二御心易一候、久其地御逗留候、何比御上候ハん哉奉レ伺候、御前珍敷儀候者、御書付にて我等其地之屋敷迄可レ給候、頼入申候、尚口上ニ令レ申候、恐々謹言

八月廿日　　片市正

文殊院(勢誉)　　且元(花押)

人々御中

(「ト半文書」)

これより二世紀半ほど後、江戸時代後期、泉州の一文人中盛彬(もりしげ)が『かりそめのひとりごと』[8]という随筆集を著した。その中に慶長一五年(一六一〇)の貝塚寺内町の相論に関わる記事が見える。中盛彬は安永八年(一七七九)の生れ、降井氏と称し、安政五年(一八五八)に没した人物である。

五六　貝塚の願泉寺

貝塚願泉寺ト半は、新川又七郎が家より出て、すこぶる豪邁の僧なりしが、同行とともに御身方まうせしなり。のちに同行どもを駿府にめされしに、させるさちあるべしともおもはざりければ、たれ一人わこそと、いふものなかりけれは、やむことなくたのまれつつ、このト半ぞいでたちぬ。さるにおもひよらずこの坊に、四町四方の御朱印下さるべしとて、あて名はなにとか、あらむと、とはせられければ、ただト半へとあそばし給りさむらへと、まうしけるにより、まうしのままにたまはりぬ。…(略)…さらばみちまでむかひにいでなんとて、これかれ、出たりしに、こはおもひよらずやト半は、うるはしきころも着て、ゆたかに乗輿し、御印物をえりにかけ、かちわかどう、前後をかこみ、折物・対の箱ここをはれといで立たたせ、めさむるばかりにゆるぎ出しかば、むかひに出しものども、いかで驚かであるべき、あなにくや、これいかにせむとて、歯をきりしかど、御印物は襟にかけたり、手をさゆべきに、あらざれば、とかくたゆたふうちに、のりものをそとひらきて、御迎太儀なりと侍のよばはるにぞ、いとゞきもつぶれ、たましいを奪はれつつ、すご〳〵とあとにつきてかへりしが、…(略)…家ふるきものどもはあまりにはらにすへかねて、この里を出しもおほかりし。

(『かりそめのひとりごと』)

豪邁の僧、貝塚願泉寺ト半は佐野川新川氏の出身で、駿河の家康の許に召され、有利な御朱印を賜わった。貝塚に帰るとき、住民に出迎えを要求し、領主気分で帰郷した。旧家の者たちは腹に据えかねて貝塚を去る者もあったという。この ト半は「石見」と呼ばれた願泉寺二代目の住持ト半了閑のことであるが、駿府(駿河)に召されたというのは、①慶長一五年に家康より貝塚寺内に諸役免許の直書を下された時のことなのか、②慶長一六年「新川盛政駿河下向記」の旅の時なのか判然としない。①とするならば家康より諸役免許の直書を拝受すべく交渉の旅であり、「新川盛政駿河下向記」の②とするならば一件落着後、ト半・盛政たち新川一族あげて、新年の挨拶を兼ねたお礼の駿河旅行である。②の場合ならば同道した盛政も伝承のト半の派手な帰郷に加わったことになる。

三　「新川盛政駿河下向記」　翻刻

慶長一六年(一六一一)睦月二日、新川盛政たちト半家・新川家の面々は新年の挨拶を兼ねて、前年の口説(くぜち)の有利な判定の御礼のため駿河の徳川家康の許に出かけた。その道中、盛政が詠んだ歌や句を綴ったのがこの下向記である。下向記といっても道中の宿所々々で詠んだ歌や句を書き

留めたものである。この下向記の一番の特徴は地方の土豪によって書かれたことである。この時代、こうした土豪によって書かれた紀行文は珍しい。同時代の史料としても文学作品としても貴重なものである。土豪たちの教養の高さが伺われる。

下向記の処々に点を施して注を書き入れる堺天神社西坊(松南院)の社僧盛誉は、堺の連歌師宗柳より古今伝授を受けた(頭伝明名録ほか)。慶長三年二月二三日「何船連歌」の連衆。慶長五年「八月十五夜月宴歌合和歌」の判詞と同一か。

凡例 (1)上段に頭注、下段に本文を載せ、本文は見やすいように地名を中心に算用数字を付けて上段の頭注に対応するようにした。

(2)本文中、盛政自身の追記と堺天神西坊社僧盛誉の追記・評注の加筆がある。各加筆の頭部に、盛政には(政)、盛誉には(誉)を付けた。

(3)適宜上、かな文字の右側に( )の傍注を付けた。

(4)歌・句に盛誉による点・長点が付けられている。点は、・長点は〳〵で示した。

(5)本文は未装訂の巻子、料紙は鳥の子、タテは18.1cm、ヨコは継紙一〇枚、計637.2cm。紙継ぎの部分に……を付け、各ヨコの寸法を記した。なお第二紙は欠落していたが今回の調査で新たに発見された部分である(中庄新川家文書1-125 2-219)

和泉国貝塚大阪府貝塚市。**くせちのいてきて**(口説)慶長15年、貝塚の卜半了閑(新川石見)と寺内町住民との争論。**音羽川** 京都市山科区山城国歌枕「山科の音羽の山の音にだに人の知るべく我が恋ひめかも」読人不知 古今集 巻13恋3。「谷風にとくる氷の隙毎に打ち出づる波や春の初花」源当純 古今集 巻1春上。

逢坂 以下、滋賀県となる。大津市逢坂 近江国歌枕「鶯の鳴けともいまだ降る雪に杉の葉白き逢坂の山」後鳥羽院 新古今集 巻1春上。杉は逢坂の景物。

辛崎(唐崎)大津市唐崎 近江国歌枕。「さざ波の志賀の辛崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ」柿本人麻呂 万葉集 巻1。「氷ゐし滋賀の唐崎打ち解けて小波寄する春風ぞ吹く」詞花集 巻1春。

打出の浜 大津市打出浜 近江国歌枕「近江なる打出の浜のうち出つつ恨みやせまし人の心を」読人不知 拾遺集 巻15恋5。

大津の浦 大津市 近江国歌枕「天離る鄙にはあれど石走るあまの(海人)浦にはあれど石走る

……(以下第一紙 ヨコ64.2cm)……

1むつ(睦月)月二日に和泉国貝塚と云所に
くせちのいてきて、事すますなりしかは、するが(駿河)のさた(沙汰)に及ひて下侍とて、

2音羽河のほとりにてよみ侍ける、
岩たゝく(発)音羽の川の河波の
うち出る色や春のはつ花

3逢坂をこゆとて雪ふりけれはよめる
相坂や雪ふる春にこえぬれは
花なき杉も花そ(発)ちりける

4辛崎の松を見てよめりける
春風にこほりうちとけ(発)てや敷
松のこゑにもたつ(発)るさゝ波
又も亦(発)あらしとそ思ふからさきの
松の一木の(発)かすむたくひは

5うち出のはまにて雪を
打出のはまの真砂に淡雪の
たまりもあへ(発)すあらふさゝなみ

(誉)右あらふとこすとも敷

6大津の浦にてよみ侍る
さゝ波や大津の浦にはる〳〵と
かすみ渡れるまほの船かけ

淡海(あふみ)の国の小波の大津の宮に…」柿本人麻呂歌枕名寄巻22。

粟津の森 大津市粟津町 近江国歌枕。「関越えて粟津の森のあはずとも清水に見えし影をわするな」読人不知 後撰集 巻12 恋4。

石山 大津市石山 近江国歌枕「都にも人や待つらん石山の峰に残れる秋の夜の月」長能 新古今集 巻16雑上。「遅く出づる月にもあるかな足引きの山の彼方(あなた)も惜しむべらなり」読人不知 古今集 巻17。

瀬田の橋 大津市瀬田 近江国歌枕 長橋(唐橋)「逢坂山を打ち越えて勢田の唐橋駒もとろどに踏みならし…」平家物語 巻10海道下。

三上山 野洲市三上 近江国歌枕「千早振る三上の山の榊葉は栄ぞまさる末の世までに」能宣(よしのぶ) 拾遺集 巻10 神楽。

野洲川 野洲市 近江国歌枕「吾妹子(わぎもこ)にまたも近江の野洲の川安眠(やすい)も寝ずに恋ひ渡るかも」万葉集 巻12。

鏡山 野洲市と竜王町 近江国歌枕。「鏡山いざたちよりて見てゆかむ年経ぬる身は老いやしぬると」大伴黒主 古今集 巻17 雑上。

守山 守山市 近江国歌枕「白露も時雨もいたくもる山は下葉残らず色づきにけり」貫之 古今集 巻5 秋歌下。

石部 湖南市石部。

水口 甲賀市水口町。

信楽の山 甲賀市信楽町 近江国歌枕「信楽の外山の梢空冴えて霰に降れる春の白雪」家隆 続拾遺集 巻1 春上。

阿野の松原 以下、三重県となる。津市、伊勢国歌枕「鈴鹿山振りはへ越えて見渡せば緑に霞む阿野の松原 歌枕名寄 巻17。

鈴鹿川 亀山市関町。「鈴鹿川八十瀬の瀧を皆人の賞(め)づるもしるく時にあへる時にあへるかも」催馬楽 鈴鹿川。

---

7 粟津の森にてよみける

かり初に都をたちておもふには
あは津のもりのあはすきにけり

8 石山にてよみ侍りける

〃都にて出るをまちし有明の
入をそおしむ石山の陰

(畧)東路旅行の心中尤候歟

9 瀬田のはしを渡るとてよめり

〃あふみのや勢多の長橋ふみならし
道いそくなり駒もとゝろに

10 もる山(守山)のほとりにて雪(霰の)又ふれ(降れ)はよめる

ふりふらす雪のまに〳〵もる山の
下葉にすかる露のしら玉

11 みかみ(三上)の嵜の雪をよみける

〃雪かすむみかみのたけのあけほのを
目にかけす行人はあらしな

(畧)尤殊勝候歟

……(紙継目 以下第二紙 ヨコ64.2cm)……

12 野洲河の川上にて発句つかう(仕)まつりし

〃やす川や幾瀬になかす柳陰

13 鏡山を見やりてよみ侍りける

〃老らくを身にしりぬれはかゝみ山
立つよりてみん影もはつかし

(畧)老者の尤候

14 いしへ(石部)と云里に旅ね(旅寝)せしに此処は名所ともきゝ(聞)及はねはよみかへして

わかれこし都の人はいとこひし
へたてゝぬへき中にしあらねは

(畧)尤候

15 みなくち(水口)といふ里にて其所となくよめる

〃あら小田を荒すきかへし水口に
せきいれけりな山川の波

16 しから(信楽)きの山に雪いとしろふ(白)ふ(降)りしかはよめ

〃しからきや外山は春も雪ふれは
猶冬こもる槙のすみやき

17 鈴鹿山よりふりさけみれはあのゝ松原まちかく○見(可)えけれはよみける

白雲か残りの雪か沖津なみの
梢をこすかあのゝ袞はら

18 鈴鹿河をわたりし時(越都にて)○物いひわたりし人のあはれともいはさりしをふとおもひ出してよみ侍り

〃人はよもおもひおこさし鈴鹿川
八十瀬の波に袖ぬらすとも

鈴鹿の関 亀山市関町 伊勢国歌枕。「えぞ過ぎぬこれや鈴鹿の関ならむ振り捨てがき花の影かな」定家 歌枕名寄 巻17。

亀山 亀山市本町。

杖突 『古事記』中巻 倭健命の伝承。杖突は石薬師から日永の間の地名。倭健命の終焉地能褒野（亀山市田村町）と思い違いか（飯田正一氏ご教示）。

（畳）伊勢まて誰かの心聞え候歟

又古き哥の心をおもひよせて

〻すゝか河波にも琴の音そかよふ

桐の丸木のはしならねとも

（畳）殊勝候歟

19 関にておんなともいたふけうしたはむれこ

となといひかけしによみてをくりける

すゝか山関路をわれはすきゆけと

心そとむる宿のあるしの

爰に六といふおんなありけり海道いちの

かたちよきおんななるよし遠近人のこと

くさにいひてこひしとのみおもはぬもな

けれは、狂哥に

すくろくのおりはに残るむねの石の

たゝろく〳〵とこふはかりなり

（畳）右両首旅宿の恋路あらはに聞候歟

20 亀山にて都ちかき同し名の有所を思ひ

よせてよめる

〻亀山のいく薬をもえてしかな

君か千とせをなからへて見ん

21 杖つき（突）と云里にてよめる

都人かへる坂路のとをけれは

石薬師 鈴鹿市石薬師。

日永 四日市市日永。

桑津 （不明）

富田 四日市市富田一色。

桑名 桑名市船馬町・舟町。

熱田の浦 以下、愛知県となる。名古屋市熱田区 尾張国歌枕。「イツカ我身ノ尾張ナル、熱田ノ八剣伏拝ミ、塩干ニ今ヤ鳴海潟……」太平記 巻2。

杖つきすかりあしたゆく来る

22 石薬師にて狂哥を

老すしれぬ薬のまねとをのつから

かしらはかたき石やくしかな

23 日なか（日永）と云所にてよめりける

あつま路に行つかれつゝつれ〳〵と

……（紙継目 以下第三紙 ヨコ63.8㎝）……

やとりくらせる比そ日永き

24 桑津といふさとにて狂哥

くはすとはむへもいひけり此里は

やせ百姓のすみ所なり

25 富田といふにてよめり

とみたるも理りなれや天か下

ゆたかなる代にすめる民とて

26 桑名に行つけは雨ふりけり、それより

ふねにとりのり長嶋を過るとて

なかめふる波路かすめる春の日の

長嶋の沖に出る船人

27 熱多（熱田）の浦につき侍れは雨もはれし

ほとに明神へまふてゝ法楽によみて

奉りける

〻剣太刀おさまる御代になることは

浅間の嶽　群馬県長野県境の火山。熱田からは見えないが『伊勢物語』による。「信濃なる浅間の嶽に立つ煙遠近人の見やはとがめぬ」伊勢物語8段。

鳴海　名古屋市緑区鳴海町　尾張国歌枕。「おしなべて憂き身はさこそなるみ潟満ち干る潮の変はるのみかは」崇徳院新古今集　釈教。

呼続の浜　名古屋市南区星崎。

笠寺　名古屋市南区笠寺町。

熱田の神のめくみなりけり

（畳）尤候歟

28 あつたのうらの朝しほさして道をは波に
ひたすはかり入江遠くみち行風景
えもいはす、おもしろきに左のかたを雲井
はるかに打詠行は、しなのなる浅間の
嵩のけふり、雪のうへよりたちのほるを
見て行過かたく、しはらく駒をとめて
よみ侍る
あさま山もゆるけふりのいたつらに
遠近人の道をとゝむる
富士のねもたちはをよはし信濃なる
あさまのたけのもゆる煙に

（畳）両首珍重候、前書見る心ち侍り候
さても〳〵うらやましく候

29 なるみにてよみける
古郷はとをくなるみの野へにきて
うら若草を枕にそかる

30 なるみの浦よひつきの浜をよめる
夕千鳥かすめるそらに迷ふらん
友よりともをよひつきのはま

31 山さきと云を過て笠寺といふ所にて晴
し雨を狂哥
昨日けふふる春雨のそら晴て
〳〵ぬきすて行やかさ寺のさと

32 あのといふさとあれは狂哥に
あの里をいかなるさとゝ尋れは
あのさとなりと人そこたふる

33 あはてのうらをよみける
しれかしなあはてのうらに住あまも
なみはたちてもみるめかるそと

34 行〳〵て尾張の国と三河のくにとの
さかい川をわたるとてよみ侍る
〳〵はる〳〵のくにのをはりのさかい河
こえて三河のはてはいつくそ

35 ありますとさとの名をいふ所にてよめり
爰に君ありますならはあつま路の
……（紙継目　以下第四紙　ヨコ63.9㎝）……
旅行我もおもひとまらん

36 三河の国八橋の川すそをあひつま川と
いふなり、そこをわたるとてよみける
東路のはるけき道をめくりきて
あひつま川のあひ見てしかな

37 ちりうといふにてよめる、

阿野　豊明市阿野町。

阿波手の浦　尾張国歌枕「名に立てる阿波手の浦のあまたにもみるめはかつく物とこそきけ」源雅光　金葉集　巻8恋下。

境川　豊明市。

有松　名古屋市緑区有松町。

逢妻川　知立市。

池鯉鮒(知立)　知立市。

八橋 知立市八橋町。三河国歌枕「そこを八橋といひけるは、水ゆく川の蜘蛛手なれば、橋を八つわたせるによりてなむ八橋といひける……から衣着つつなれにしつましあればはるゞくきぬる旅をしぞ思ふ」伊勢物語 第9段。

三川水 御溝水 内裏の庭、特に清涼殿の庭の溝。三河と掛ける。「桜の花の御溝水に散りて流れけるを見てよめる」（詞書）古今集 巻2 春下。

矢作の宿 岡崎市矢作町。

梅花木の下水にちりうけは
　波まて春のにほひ成けり

38 八橋にて川のほとりにおりゐてよみ侍
　八橋や水行川のくもてにて
　かすみ渡れる春のあけほの
　昔此ところにて在中将のかきつはた
　といふ五文しを句のかみにすへて旅の
　心をよまれしとなり、此五もしをかしらに
　をき、恋の哥よめと友とせし人のいひ
　しはかりを、かへりみす、しらすよみに
　よめる
　かくまてはきみもしらしなつくゝと
　はしめもはてもたのみけるとは
　又いつることは三川水といふことを句の
　かみにをき、かきつはたといふ五字を
　句の下にをき、此ところの春の眺望
　をよめといへはよめる
　水行か霞こめてきわか来つゝ
　見渡す橋は月のあけかた
　（畧）扨もくゝ達者なる哥よみなるへし
（政）只三十一字をならへたるはかりなり

39 やはきかしゆくにて誹諧

岡崎 岡崎市。

藤川 岡崎市藤川町。

山中 岡崎市舞木町山中町。

あつさ弓よりくる人のこゝをしも
　箭はきなりやといひ捨て行
　（政）あまり弓をはなれぬはいかいかな

40 岡崎名所ならさる所くゝにては、あるは
　あるは其所となくよみかくし物の名、風
　情によみ侍りし、こゝにても
　〈陰高きもりの木のまに消残る
　　雪をか鷺のゐると見つらん
　（畧）いかてかさきの面影なるへし

41 藤川と云所にても、かくし題によめる
　うき人を我かみなかみの涙川
　なかれて落る袖は渕かは
　（政）これも水辺にもつれ過たるよみ
　　さま、いとはつかし
　此所にかりねせし夜、雨しきりにふり、
　ところくゝもりていふせし、さなきたに
　うき旅の山路の里のまろねに、古里
　のことおもひやられて
　かり初とおもひ出にし我宿の
　ふる春雨のもりやしぬらん

42 山中といふさとにてよみ侍る
　〈〈住人のありともしらぬ山中に

たれよふこ鳥こゝちなくらん

……（紙継目 以下第五紙 ヨコ63.6㎝）……

43此山辺を行は、もとかしはくり（供料）やうのも枯葉ちらて、梢にありしか、春雨にうるほひてかつ〳〵紅葉の色も残りたれは、いとおもしろくて

〳〵露時雨そめたる秋のもと柏
もとの色をそ春も見せける

44赤坂をかくし題にてよめりける

いかはかり人をつらしとうらみまし
あかさかなさとおもひしらすは

45五位（冷泉）といふ宿残りすくなく両町ともにやけて、あはれ成ありさまなれは、狂哥よめる

中〳〵にくらいれはこそ誰しかも
やきそこなへるこいのもろむね

46それよりすこしかほとありて、二道と云所有、これは石まきこえ（石巻越え）と海道へとのちまたにわかれし所なり

今よりは二道かへるあた人の
ちきる詞はたのましとこそ

47小坂といふ所を狂哥に

赤坂 豊川市赤坂町。

五位（御油） 豊川市御油町。

二道（二見道） 豊川市御津（みと）町、三河国歌枕「妹もわれも一つなれかも三河なる二見の道ゆ別れかねつる」高市黒人 万葉集 巻3。

小坂（小坂井） 豊川市小坂井町。

吉田（今橋、豊橋） 豊橋市今橋町。

高師山 豊橋市高師 三河国歌枕（『歌枕名寄』には遠江国）「猶しばし見てこそ行かめ高師山麓に巡る浦の松原」為氏 続古今集 巻10。

燧坂 豊橋市二川町。

こさかしき人にとはゝや東路の
道のはてをはいつくなるそと

48吉田をもかくし題にてよめり

世中に我とひとしき人しなくは
いはしよしたにおもふおもひを

49高師山は勅撰には遠江に入し、今は三河なり、国のさかいなれはいつの世そ三河につらん、此山は野のはつれ、海辺にある原にて、いさゝさか高きところもなし、いひしらせすは山とはしらしかし、さてよ

里人にとひつゝ見すはしられめや
名にはたかしの山ときけとも

（巻）右結句何とそあるへし歟

又発句

空に幾重かすむ梢の高師山

50ひうち坂いと面白山なり、其山の尾崎に雲にそひえたる高き岩戸有、岩戸のまへには石の鳥居神さひて、岩戸の中に石の社頭有ける、観音ともいひ又は神代の岩戸ひらけし所也とも、とり〳〵人のいひけり、其所に寺有しも、今は末の世なれは、斗藪の住居もかなはさるらん、

二川 豊橋市二川町。

旋頭歌 五・七・七・五・七・七の歌の形式。古代歌垣で唱和された五七・七の片歌が一人によって歌われるようになったという。

二村山 愛知県豊明市沓掛町。三河国歌枕「くれはとりあやに恋しく有りしかば二村山も越えずなりにき」清原諸実 後撰集 巻11 恋3。三河国の最後に、同国で訪ねなかった二村山を詠む。

潮見坂 以下、静岡県となる。湖西市白須賀。

白須賀 湖西市白須賀。

古跡計也、

山伏のこしにつけたるひうち坂
うつ火のまにもかはる世の中
久かたのあまの岩戸の其むかし
ひかりうち出す火うち坂かは(袋も)

(譽)両首とも殊勝覚へ候

51 二川と云里をよみかくして施頭哥

……(紙継目 以下第六紙 ヨコ63.6cm)……

玉手箱みにかはりたるふたかはとおもふ
成けりいかにすれ共あふことはなし

52 二村山と云を三河国道すから尋とひし

かともしれす、此あたりおもしろき山たゝ
すまひともなれは、此あたりにてもあるや
らんとおもひよせて帰るさによめる
、都かたあやに恋しくおもふより
二村山を又もこえけり

53 塩見坂にて

しほみ坂打出る時そからかりし
山路の旅も忘られにける

54 (白須賀)しらすかといふに出て

とひきくもむつかしかりき中〳〵に
しらすかたりのあまのさえつり

しらすけの浪(白菅浪) 遠江国歌枕「松かげの入海かけてしらすげの湊吹き越す秋の塩風」前内大臣 続古今集 巻17 雑上。

志香須賀渡 (不明)

55 二川と塩見坂とのあひたにわつかなるみそ河有、これなん三河と遠江のさかひなれは、しらすかは遠江也、此国にしらすけのみなといふ名ところもし此所のことやらんおほつかなし

しらすけのみなとは春の塩風も
入海かけて吹をくるらん

56 又しかす香のわたりと云も三河なり、此津と尋るに、其所しれす、これも又こゝにや有らん、此ところへむかしはみなのくち有て、おくは七里はかりの入海にて入海と大海との間にはゝ二町はかりになかさ二里計の真砂打つゝきてしろき帯又はぬのなとはへたるやうなり、しらすかより十町はかり有て、橋本と云村あり、此所より濱名の橋をむかひの真砂地へかけたるよしいへり、百とせ計のむかし高波あかりて、此真砂地にあらいと云里ありしをひとりものこさすとりてより其さともたえ侍ると也、引なみつよくてみなとへのみかへられ(て)真砂地の東のはし二三町はかりひきゝりて入

橋本　湖西市新居町。

浜名橋(跡)　湖西市新居町　遠江国歌枕「潮満てるほとに行き交ふ旅人や浜名の橋と名付けそめけん」平兼盛　拾遺集巻6。明応七年(一四九八)八月の東海沖大地震でそれまで陸地であった浜名湖と太平洋の遠州灘の間の陸地が水没、今切となって湖には海水が流入した。水没した陸地を流れていた浜名川がなくなり、その川に架かっていた浜名橋もなくなったが、その後も歌に詠まれた。「今は皆橋柱さへ朽ち果てて浜名ばかりを聞き渡るかな」権僧正永縁　堀河百首。

大浦　(不明)

名高浦　(不明)

新井の郷　湖西市新居町。

今切　湖西市新居町と浜松市西区舞阪町の境、浜名湖と遠州灘が繋がる部分。明応七年(一四九八)八月の大震災により浜名湖に海水が入った(地震の年月には諸説ある)。

前坂　浜松市西区舞阪町、近世初頭には「前坂」という。

浜松　浜松市中区伝馬町。

混本の歌　『古今集』真名序に「長歌短歌旋頭歌混本之類、雑体非一、源流漸繁」とあり、短歌形式の一句少ない歌の形式。「雨により…」の歌は五・七・七・七となり、中五を欠く。

池田の宿　磐田市池田「池田の宿にもつき給ひぬ。彼宿の長者がゆや(紙町)がむすめ……」平家物語　巻10海道下。

中泉　磐田市中泉。

見付の府中　見付の国府(こふ)　静岡県磐田市見付。

海と外の海とひとつになりしより、此処を今切といふ也、それより此入海五十丁かほとは船にてわたる也、濱名のはしも此時よりたえたり、濱名といふ里は七里計のおくにありながら、こゝをなん濱名のはしと名付しと也、其橋わたせし

あともさなからにて、塩のみつ時は橋本のきはまてみちかくれはよめる

(筆)〈中たえし濱名の橋の名にしおへは(たえにしを)

塩のみちきて波そかけゝける

57 大浦しかすかよりすちかへてみゆれは

都人袖をしほりて大の浦を

そかひに見つゝのほり(筆)こそすれ

……(紙継目　以下第六紙　ヨコ63.5cm)……

58 名高浦をよめる

我か袖をぬらしてそぬる此石の

なたかの浦の磯の真砂に

59 あらいの郷を

〈あら磯に枕もかれはよもすから

耳もそあらふ沖津しら浪

(畳)右但五もしあるへく候歟

60 今切を

〈うら波の立ゐまきれ(筆)て沖つすに(もしけき歟)

うきねの鳥のこゑすたくなり

61 前坂を

浦の松にいをねし鷺のあけたては

あしまへさかり求食すくなり

62 はま松(浜松)といふ所にて混本の哥をよめる

雨によりはま叺か枝も

今一しほの緑そふなり

63 雨をもいとはて天龍河を渡て、池田の宿にとまりて、かの湯屋(紙野)かしるしの石を見て

ふるあとのしるしの石を見るからに

むかしのなみた今もおちけり

又池田をかくし題にてゆや(紙野)かことを

いにしへの湯けたのかすにかそへまし

今のゐけたのふり残るとも

64 中いつみ(中泉)をよめり

都よりあつまのいなかいつみんと

あらましこともおもひ出けり

65 みつけ(見付)の府中にてよみ侍りける

我思ふ人を見つけの府中ならは

いかはかりかはうれしからまし

木原 袋井市木原 熊野権現社。
野原行き 「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」額田王 万葉集 巻1。
以下、静岡県下の地名に関しては大塚勲氏のご教示によることが多い。
袋井 袋井市袋井。

原川 掛川市原川。

掛川 掛川市掛川。

西坂 掛川市日坂(西坂)。

小夜の中山 掛川市佐夜鹿 遠江国歌枕「甲斐がねをさやにも見しがけけれなくよこほり伏せる小夜の中山」読人不知 古今集 巻20 東歌。「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」西行 新古今集 巻10 羇旅。

金の薬師 菊川市富田。火剣山(金薬師山)。

菊川 島田市菊川。

---

66 木原といふにてよめる
、野はらゆきしのはらをゆき木原行
床も枕もかはるよな〳〵
(巻)しめの行ノ句残し候

67 袋井と云を狂哥に
大こくのうしろにおへる大ふくろ
いてそよぬはんくちのほころひ
(巻)哥将成作意にて候

68 はら川(原川)といふにて狂哥二首
家高きゆかりにも似ぬけはひ也
いかさまこれはをとりはらかは
いかにしてなにとすれはかはらのか
かくあさましくすりきりにけん

69 かけ川(掛川)によみける
さなきたにしほるゝ物を旅衣
猶ぬらせとやかけ川のなみ

70 西坂のわらひもちゐを狂哥に
にし坂のわらひもちゐをみつか一つ
くひこそしつれねのこならねと
(巻)一ツ所望候

71 さや(小夜)の中山にて三首
、甲斐か根はさやの中山のみならす
たちかくすなり雲もかすみも
命あらはとはいひなからおもひきや
さよの中山けふこえんとは
春の夜の朧月夜にしく物は
……(紙継目 以下第八紙 63.7㎝)……
あらしのとこのさやの中山
あつまの名所あまたか中に此山の
風景又たくひなし
……

72 此中山の卯辰のかたにそひえたるたけあり、かねやくしとて人の耳目をよくなをし給ふと人のいひけれは一通の状をつかはしける
眼無翳空裡無花了天耳通
妙高頂啼聴蚊聲故無耳
聾無明之憂若福祐之
薬者一服申請度者也恐惶
謹言
慶長辛亥仲春初二 新川某
金薬師如来御坊
十二神分有之

73 きく川(菊川)をかくし題にて
、旅人のあひやとりしてかたるにそ

桑原（不明）

大井川 静岡県最北端の南アルプス間ノ岳（静岡市葵区田代）より南流し、右岸に掛川市・牧之原市、左岸に島田市・焼津市の間を流れて駿河湾に注ぐ。遠江・駿河の国境の河川。

島田 島田市本通付近。

清水峠（不明）

いさしらさりしこともきくかは

74 栗（諏訪原カ）のはらにて狂哥

こほ〳〵とふみとゝろかすなる神も
おちしと思ふ栗原のさと

（巻）こゝは栗原のそのまゝに候

75 遠江の国と駿河との中にある大井川を渡るとて発句

〳〵いく筋か霞むふち瀬の大井川

76 嶋田に付て宗長法師の生所を尋れはゆかりもいまたあり、そこにて発

咲かへれむかし（愛染堂）の宿の梅の花

（巻）右柴屋としてはいかゝ、宗長満足たるへし

花ちりて残すは梅の匂ひかな

77 清水たうけ（峠）にのほれは遠近の山雨の名残の雲たちのほり、山をはなれしに富士の根はなかはのそらは雲にかへれふもとのかたのみ見ゆるもこと山をぬき出てたかけれはよめりける

富士のねやなか半は雲にかくろへとまたなかそらにあふき見らるゝ

（巻）一目見申度事候
口惜候

藤枝（藤江田） 藤枝市藤枝。

岡部 藤枝市岡部町岡部。

明石の浦 「明石かの岡辺の家も松の響き、浪の音にあひて心ばせある若人は身に沁みて」『源氏物語』明石。

宇津の山 静岡市駿河区宇津ノ谷 駿河国歌枕「駿河なる宇津の山辺のうつつにも夢にも人に逢はぬなりけり」伊勢物語 第9段。

丸子 静岡市駿河区丸子。

木枯の森 静岡市葵区鳥羽 駿河国歌枕「消え侘びぬうつろふ人の秋の色に身を木枯らしの森の下露」定家 新古今集 巻13 恋4。

安倍川 静岡市葵区から駿河区を流れ、駿河湾に注ぐ。

78 藤江田（藤枝）にてかく

花の咲くころしもきたる我ならはおりかさしつゝゆかんふちえた

79 おか（岡部）へといふ所にてよめる

〳琴の音にひゝきかよへる松風を岡辺のやとにきゝくらすかな

（巻）明石の浦心ち申候

80 うつ（宇津）の山をこゆとて二首

〳むは玉の閨のうつゝも春のよの夢にもたとるうつの山こえ

夢にたにまさらさりけりうつの山うつゝに一目見えし面かけ

81 まりこ（丸子）と云里をすくるとてするかなるふしの煙にたくふらん

……（紙継目 以下第九紙 63.5㎝）……

むねのおもひのあまりこかれて

82 木枯の森にてよめる

人こゝろうつろふに身をこからしのもりのしつくにぬるゝ袖かな

83 安陪川をわたるとて取あへすかく

坂こえてけふはいくかの旅ころもあへの河原に我（巻）たとりはきにけり

阿倍田 静岡市駿河区 駿河国歌枕「坂越えて安倍の田面に居る鶴のともしき君は明日さへるがも」万葉集 巻14。

阿倍の市 静岡市駿河区 駿河国歌枕「焼津辺にわが行きしかば駿河なる安倍の市道に逢ひし児らはも」万葉集 巻1。

府中(駿府) 静岡市葵区 駿府城公園を中心とした地域 秀吉没後、関ヶ原合戦を経て家康は伏見城・大坂城に常駐したが、慶長九年(一六〇四)以降江戸・駿府、特に慶長一五年以後は駿府滞在が多い。

志豆機山・浅間神社 賤機山 静岡市葵区宮ヶ崎町 駿河国歌枕「時雨の間なくし降れは駿河なる賤機山に錦織りなす」公実堀河百首。

(政)此てにをは不堪の身にはならひ
ありとてもすへらさることなから、
人に見することにしあらねは、
よめりしなり、(誉)てにをは大かた究
申候、又吟味むつかしく候、
たとりにては、いかゝ、

84 あへ(安倍田)田を発句に
あへ川や田鶴羽をかへす田面かな

85 あへ(安倍)への市路を
するかなるあへの市路にわかゆけと
あひ見ることはなかりけるかな

86 かくて府中につきて二月六日に御所
にしこう申せしに、慈悲の御まなしりに
かゝり、いつくしみの御ことのはをかけま
かたしけなくもなにゝつゝまんと袂にあ
まておりひしに、御奉行しゆも心よせ
あり、かのくせ(口説)ちのこともことなくにお
くたされ、あんとのおもひに任し侍る
志豆機山(賤機山)にまいり浅間をふしおかみ、山
のいたゝきへよちのほれは、おもしろき
けしき、ふしの雪、かひ(甲斐)のしらね、あへ
市路の行かひ、するかのうみとりあつめ
佳景、此山の枕桧原の中に紅梅初桜桃

草薙川 静岡市清水区草薙を北流する。

江尻 静岡市清水区江尻町。

駿河の海 静岡県 駿河湾一帯 駿河国歌枕「駿河の海磯辺(いそへ)に生ふる浜つづら汝を頼み母に違ひぬ」万葉集 巻14。

清見が関 静岡市清水区興津清見寺町。

あひそ川(角田川) 今の波多内川、清水区横砂と興津清見寺町の間を流れる。

までも一時にさきみたれぬ、都の花は今
比はけしき計もさかしを心とき花
の心はへかな、鶯もこゑあやをなしてな
はよめる
〻我かおれる志豆機山にうくひすの
こゑをあやなす春をしそ思ふ
(誉)但、五もしおり出す者にては又するか
しらす候歟

87 清見か関にとて行道にくさなき(草薙)といふ
川にて狂哥
あしくひのきるゝはかりにひえにけり
こや草なきのつるきなるかは

88 ゑし(江尻)りにて狂哥
春雨にさすからかさのえしりまて
ぬらすはいとふおちこ若衣

89 する(駿河)かのうみを
東路のするかのうみのはまつゝら
頼をかけてくるないとひそ

90 清見かせきのこなたにある川をはあひそ
川ともいひ、又すみた川ともいふ、清見寺
……(紙継目 以下第一〇紙 ヨコ63.2cm)……
景ある、其一景なるよし人のいへる、そこ
にてよみ侍る

清見寺 静岡市清水区興津清見寺町。

三保の松原 静岡市清水区三保駿河国歌枕「忘れずよ清見が関の波間より霞みて見えし三保の浦松」中務卿親王 続古今集 巻9 羇旅。

有度浜 静岡市駿河区大谷から清水区三保にかけての海岸 駿河国歌枕「度浜に天の羽衣昔着て振りけん袖やけふのはふりこ」 能因法師 拾遺集巻20雑6。

文殊院・勢与・道春 次節参照。

富士の煙 「今は富士の煙立たずなり……」古今集 仮名序。

〃見せはやな都の人にいほはゝや
　隅田河原の朧月夜を

91 清見か寺のうへにあるつゝらおりをのぼりて庵主にはしゐして一日なかめくらしけるに、入江に海士のつりふねうかみなから沖よりも大ふねともまほにふかせて入くるおもしろさ、うらにはあまともの藻しほをつみ、かたつかたにはしほやくもあり心のおくへとをか旅人も行やくひ（海上）なかめやる、みほの松原かすみにうかひたる、心もつき言葉にものへかたくや庵主のなとて哥よみたまはぬとそゝあかせとも心も景にとられてなし（こ）折哥もよみ出てすなからかく

〃忘れめやきよみかせきの波の上の
　かすみにうかふみほの松原

（巻）御詠哥誠候、其興見る心ち申候

92 有渡はまを
　昔こそあまの羽衣まれにきて
　袖ふりけれときゝしうとはま

（巻）本歌の詞聞申候

93 又府中に帰りて文殊院興行にて和漢ありしに、我に発句をつかうまつれと有しを、辞するに道あらて

〃雪わけていつさく花そ富士の峯

（巻）尤殊勝候

春半詩雲寒　勢与
霞隙月猶淡　道春

94 ふしのけふりの今はたゝすなりにけりといふ序の心にて（富上）

〃四方にな引春のかすみやふしのねの
　けふりに今はたちかはるらむ

あつまにくたらは、ふしを見んことうらやましといふ人のことをおもひ出て（富上）

〃ふしのねの花にしあらは手をりつゝ
　また見ぬ人に見せまし物を

（巻）拙僧も一枝申請らん物を

付墨

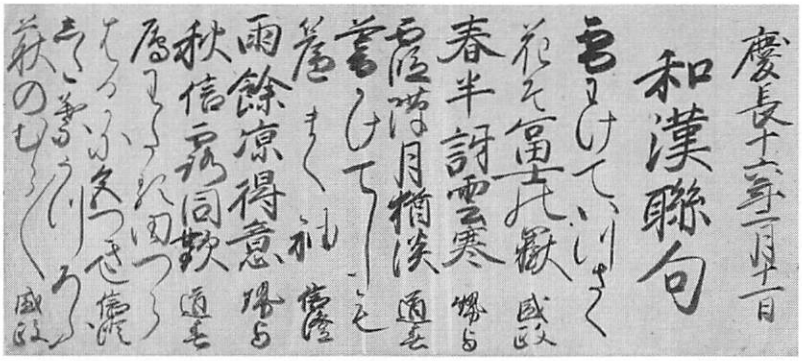
御詠歌　卅一首内
　長四首

御発句　四句内
　長一句

盛誉（花押）

四　駿府文殊院における「和漢聯句」翻刻と連衆たち

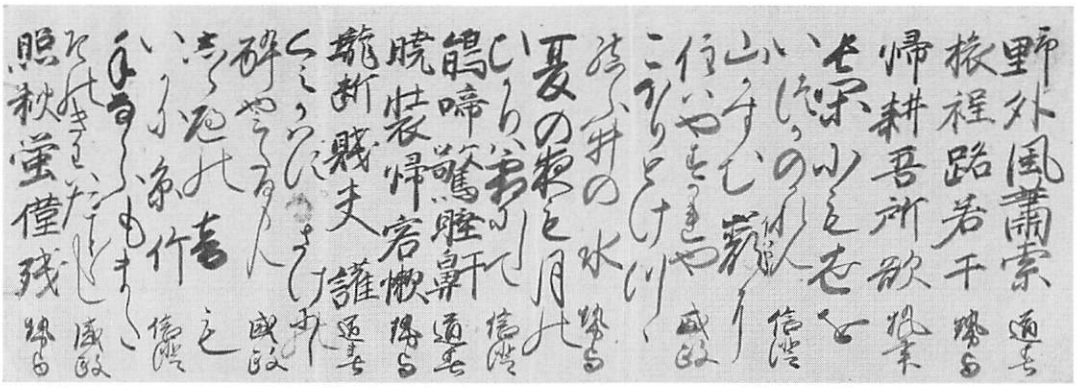
三保の松原や清見が関を見物した盛政一行は再び駿府に戻り、盛政一人が文殊院の和漢聯句に招かれ、発句を詠んだ。懐紙の料紙は鳥の子、タテは18.1cm、ヨコ51.7cm（中庄新川家文書1-189）。



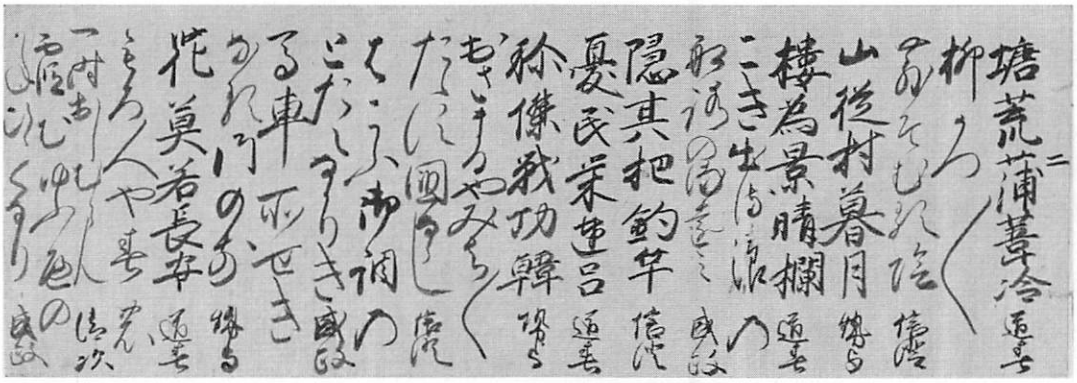
（初折表）
慶長十六年二月十一日

和漢聯句

雪わけていつさく　盛政（新川）
花そ冨士の嶽　勢与（文殊院）
春半訝雲寒　道春（林羅山）
霞隙月猶淡　信澄（林東岱）
暮かけてしも
簾まく袖　勢与
雨餘涼得意　道春
秋信露同歎
鴈わたる田つら
はるかに色つきて　信澄
した葉うつろふ
萩のむらく　盛政

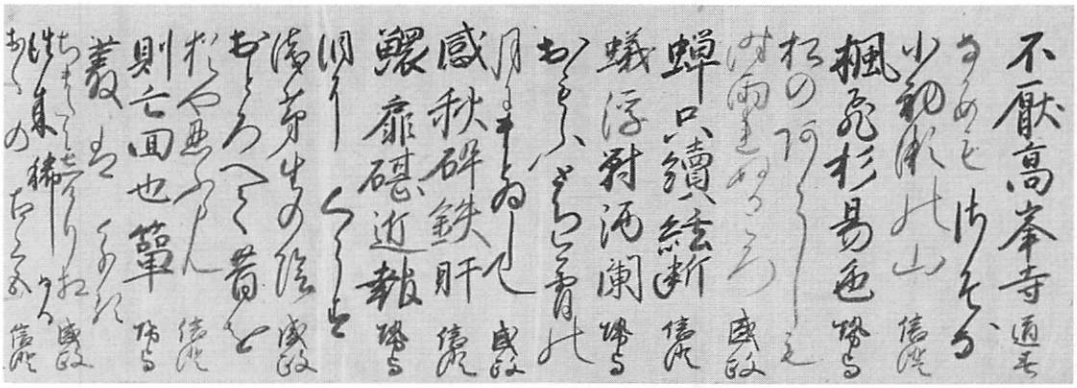


（初折裏）
野外風蕭索　道春
旅程路若干　勢与
帰耕吾所欲　執筆
長閑にも世を
いつかのかれん　信澄
山かすむ巖（イハヤ）に
住ハやすかれや　盛政
こほりとけつゝ
結ふ井の水　勢与
夏の夜も月の
ひかりハ霜にして　信澄
鵑啼驚睡鼾　道春
暁装帰客歎（歎）　勢与
壠（壠）断賤夫讙　道春
くミかハす　さけにし（なノ消ノ跡）（このノ消ノ跡）
酔やミたるらん　盛政
しらへの音も
いかに糸竹　信澄
手ならふもまた
そのきわハたとくし　盛政
照秋螢僅残　勢与



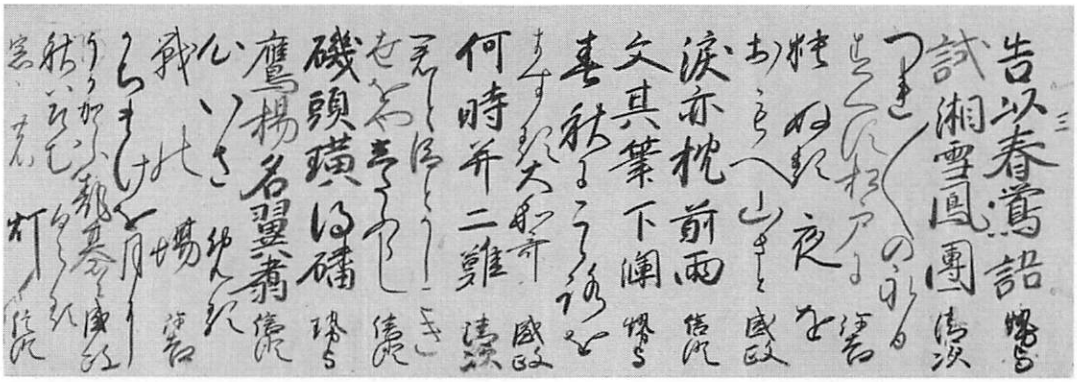
（二折表）二

塘荒蒲葦冷　道春
柳かつく　信澄
散りそむる陰　勢与
山従村暮月　道春
樓為景晴欄
こき出る浪の　盛政
船路の浦遠ミ　信澄
隠其把釣竿　道春
憂民栄達呂（回）　勢与
称傑戦功韓
おさまるやみちく　信澄
たゝす国ならし
はこふ御調の　盛政
とたえなかりき
馬車所せき　勢与
なる門の前　道春
花莫着長安
もろ人や春の　清次（茶屋四郎次郎）
一時おしむらん　盛政
霞むゆふへの
かねひゝくなり

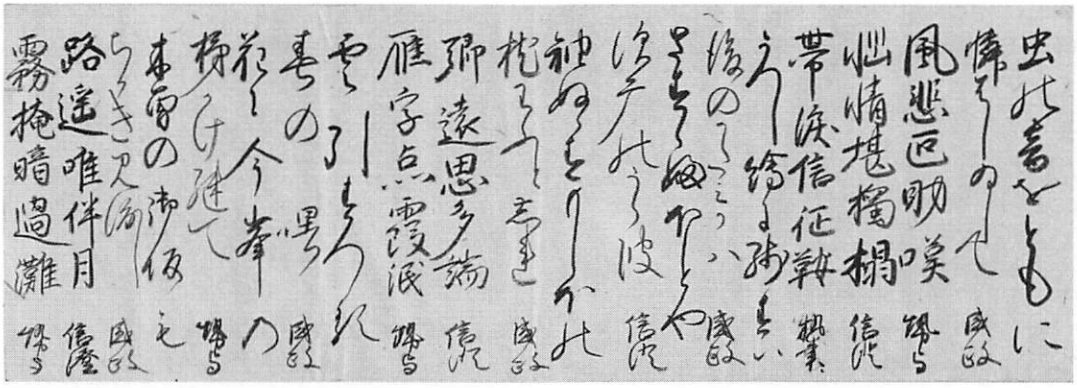


（二折裏）

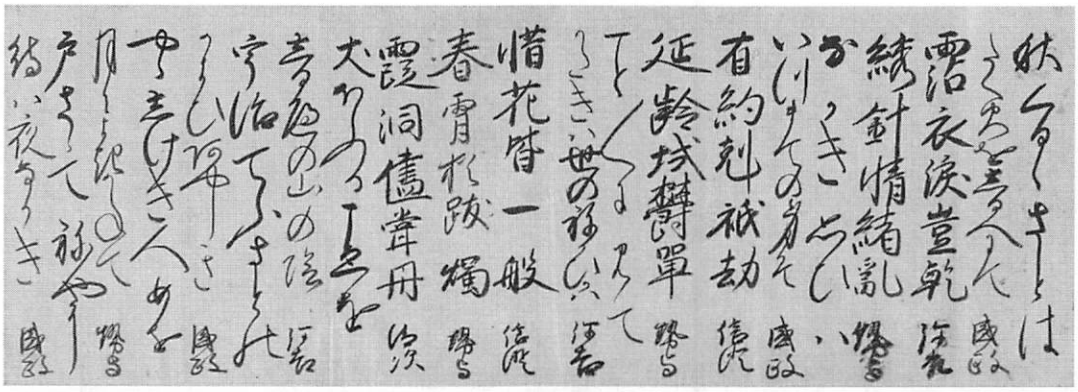
不厭高峯寺　道春
なかめもさそな
小初瀬の山　信澄
楓飛杉易色　勢与
松のあらしも
時雨れぬるころ　盛政
蝉只續絃断　信澄
蟻浮對酒闌　勢与
おもふとち今宵の
月にまとゐして　盛政
感秋砕鉄肝　信澄
鰻扉礎近報　勢与
泪にくらす
浅茅生の陰　盛政
おとろへて昔を
猶や忍ふらん　信澄
則亡回也簟　勢与
叢は分る
ちまたにしけり相　盛政
往来希なる
おくの古宮　信澄



（三折表）三
告以春鶯語　勢与
試湘雪鳳團　清次
つれつれの永日
すくす松戸に　弥吉
独ぬる夜を
おもへ山さと　盛政
涙亦枕前雨　信澄
文其筆下瀾　勢与
春秋にこゝろを
よする大和哥　盛政
何時并二難　清次
君と臣とかしこき
世をやしたふらし　信澄
磯頭璜得磻　勢与
鷹揚名翼翥　信澄
心いさめる
戦の場　弥吉
かちまけを月に
（あり消し）
うかかふ乱碁に　盛政
秋ハそむくる
窓の灯　信澄

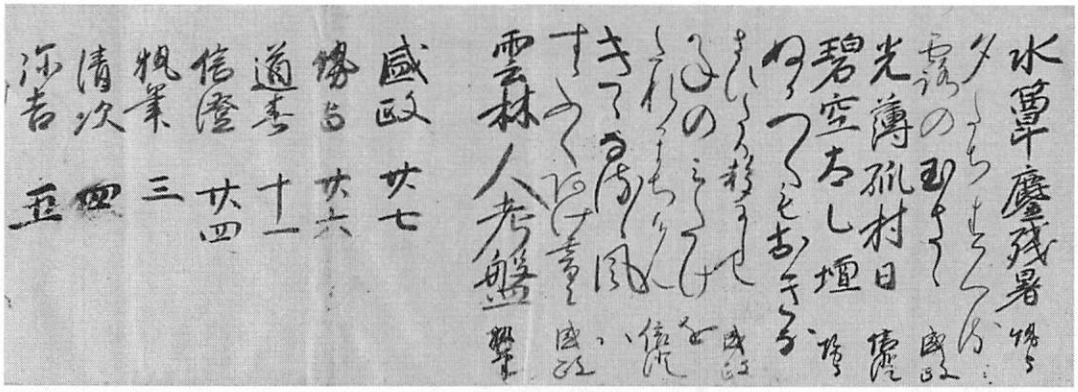


（三折裏）
虫の音をともに　盛政
憐はしゐして
風悲亘助嘆　勢与
悩情堪獨榻　信澄
帯涙信征鞍　執筆
うつし絵に残すハ
後のかたミかハ　盛政
さすらふほとや
須磨のうら波　信澄
袖ぬらすもしほの
枕わふとしれ　盛政
郷遠思多端（諧カ）　信澄
雁字点霞泯　勢与
雲引すつる
春の曙　盛政
花に今峯の
梯かけ継て　勢与
木曽の御坂も
ちかき見渡し　盛政
路遙唯伴月　信澄
霧掩暗過灘　勢与



（名残表）

秋くるゝさとは　盛政
たく火をしるへにて　弥吉
霑衣涙豈乾　勢与
綉針情緒乱　盛政
なかき思ひハ　信澄
いつまての身そ　盛政
有約剋祇劫　信澄
延齢拭蔣單　勢与
こと〳〵に見て
かたきハ世のねかひかハ　弥吉
惜花皆一般　清澄
春宵猶跋燭　勢与
霞洞儘嘗丹　清次
犬ほふるこえを　弥吉
しるへの山の陰　弥吉
宇治てふさとの　盛政
かよひあやしき　盛政
やゝしけき人めを　勢与
月によきかねて　勢与
戸さゝてねやに　盛政
待ハ夜なかき　盛政



（名残裏）

水簟塵残暑　勢与
夕たちすくる　盛政
露の玉さしゝ　信澄
光薄孤村日　勢与
碧空太し壇　盛政
ぬかつくもおきな
さひたる声にして
かねのミたけを　盛政
たれかまちけん　信澄
きゝなるゝ風ハ　盛政
すゝふくあけ暮に　執筆
雲林人考盤

盛政　廿七
勢与　廿六
道春　十一
信澄　廿四
執筆　三
清次　四
弥吉　五

この文殊院における和漢聯句の一座の詠み人、連衆について触れておきたい。最後に記された句上げの順に見る。

発句を詠む盛政についてはすでに述べたが、和泉国からの同行人中（人物も人数も不明であるが）、ただ一人この和漢聯句に招かれたことに注目しておきたい。

脇を詠む勢与は、関ヶ原合戦の後、応其の跡を継いで高野山で勢力を持った勢誉である。前任者の応其は木食上人と呼ばれ、秀吉の紀州攻めを機に高野山一山の支配を任され、青巌寺・興山寺の住職となり、秀吉政権に深く関わった。しかし関ヶ原合戦では石田三成側に立ったので、高野山を追放され、代わって一時、勢誉は高野山の支配を任され、さらに家康に招かれて駿府の文殊院に居住した。それは秀吉の政治顧問であった応其とよく似て、勢誉もまた家康に近侍した。慶長一七年（一六一二）没、六四歳か。連歌懐紙に見える「勢与」は連歌や和漢における勢誉の名である（『連歌総目録』明治書院 平9）。「高野山事略」に「神祖 駿府に御座を移されし時、勢誉を召れて、今より後は常に御前に伺候すへしとて、其寺地を下されしかは、文殊院を駿府に建立して移り住し……慶長十三年の事也といふ」とある。また勢誉は和泉国木島郷（貝塚市）の阿部氏出身で新川一族と地縁関係にあった（「高野山総分方風土記」『大日本史料』慶長一七年（一五一二）三月二三日条「高野山文殊院勢誉寂す」の項）。

第三を詠む道春は林羅山の僧名である。羅山は天正一一年（一五八三）に生まれ、京都で諸学を学び、慶長一〇年（一六〇五）家康に謁見後、江戸の秀忠、駿府の家康に近侍、出家して法名を道春と称した。慶長一六年家康に随行し上洛。江戸幕府の朱子学樹立。明暦三年（一六五七）没、七五歳。

四句目を詠む信澄は林羅山（道春）の弟、林東舟である。二折表一三句目を詠む清次は三代目の茶屋四郎次郎である。宗匠の連歌の進行を助ける執筆は不明である。勢誉と親しい者、家康の家臣かも知れない。

五　「新川盛政駿河下向記」の史料的魅力

ここに紹介した「新川盛政駿河下向記」の史料的魅力を考えてみたい。

○　盛政が行く先々（多分に宿泊地ごとになる）で詠んだ歌と詞書きを並べた紀行文で、『伊勢物語』第八段に見る伝統的な歌日記である。一応、一か所で一首、または一句詠んでいるが、二首・三首に及ぶこともある。

○　歌には狂歌もあって、歌に詠まれる名所の歌枕では、主に本歌取りによる和歌を詠む。例えば**3**の逢坂では後鳥羽院の「杉の葉白き…」を本歌として雪を花に見立て、**71**の小夜の中山では『古今集』の東歌「甲斐が根」と『新古今集』の西行の「命なりけり」を本歌として二首詠んでいる。

一方歌枕でない所では地名や物の名を詠み込んだ狂歌を詠んでいる。例えば**22**の石薬師では薬と石を詠み込み、**44**の赤坂では地名を隠し題にして「……あかさかなさとおもひしらすは」と詠んでいる。

○　盛政は武士（土豪）としてかなり教養を積み、和歌など古典に秀で

ていたことがわかる。中世から近世初頭にかけて、幾つかの紀行文、一条兼良の『藤河の記』や宗祇の『筑紫道記』・道興准后の『廻国雑記』などがあり、武士としては細川幽斎の『九州道之記』『東国陣道記』や薩摩の島津義久の弟、島津家久の『家久君上京日記』がある。しかし新川氏は戦国大名や国人衆よりもランクの下の土豪代官で[9]、このクラスの武士の紀行文はあまり例を見ない。そうした中に「新川盛政駿河下向記」は注目すべき紀行文といえよう。盛政の教養については前掲の山村・大利の「「難波草紙」再考」（鶴崎編『地域文化の歴史を往く―古代・中世から近世へ―』和泉書院刊 平24）に詳しく見ることができる。

○ 慶長年間の東海道の紀行文は少ないので、地方史の史料としても貴重である。以下、箇条書きに気付いた事柄を記す。

○ **24**の桑津については不明であるが、本文では日永と富田の間にある。

○ **56**の志香須賀渡の後に「入海と外の海と一つになりしより、此処を今切といふ也」とある現在の浜名湖と遠州灘が繋がった地形の形成については、日本歴史地名大系『静岡県の地名』（平凡社）には明応七年（一四九八）の地震、または永正七年（一五一〇）の高潮によると推測しているが、近年、平成七年の阪神淡路大震災や平成二三年の東日本大震災以降に震災史に関する研究が進み、明応七年の地震説が有力視されている[10]。この下向記も慶長一六年の現状を示す貴重な史料である。

○ **77**の清水峠について、静岡県下の歴史に詳しい大塚勲氏のご指摘によると、慶長八年（一五〇八）にあったという大井川の洪水により島田から東の東海道の道筋が北側に移されたといわれているが、この下向記はそれを証明する唯一の史料となる。大塚勲氏は近く実地踏査を計画されているという。

○ **93**の府中（駿府）文殊院における和漢聯句には政治的な意味や目的が伺われる。この下向記の旅があった慶長一六年は関ヶ原合戦後一一年、大坂の陣前四年に当たり、徳川氏は大坂方に対して少しでも味方を増やし、勢力を拡大をはかった時期である。和泉の卜半・新川一門を取り込むことは徳川方にとって重要な意味を持つのである。寄り合いの文芸である連歌や和漢聯句は同座した連衆の心を一つにする、一揆的雰囲気を醸し出す効果がある。一座に招かれた盛政はその座に見合う歌・連歌の素養があったのであろうが、家康の有力な側近である勢与（勢誉）や道春（林羅山）に囲まれて発句を詠むように勧められ、連衆中最も多い二七句も詠む。春のこととて発句には花を詠んだ。まさに花を持たす至れり尽くせりの歓待ぶりである。これが政治的に意識され、計画されたか否かは不明であるが、結果的には盛政をして、同道した一行をして、満足して和泉国貝塚に帰すことになったと思う。

天正一五年（一五八七）のこと、秀吉の九州攻めの後、敗北した島津義久はすぐに上洛して暫く秀吉の許に滞在した。言わば謹慎である。その間、義久は玄旨（細川幽斎）・興山上人（木食応其）・聖護院道澄や連歌師紹巴・昌叱たちの百韻連歌の出座している[11]。面々は秀吉に親しく、紹巴・昌叱は秀吉お気に入りの連歌師である。島津義久は九州の大大名であるが敗軍の将であり、新川盛政は一地方の土豪であるが訴訟の勝

利者である。身分の相違、立場の相違はあるが、秀吉や家康の側近たちに囲まれて連歌を興じたことに注目したい。座を一にする寄り合いの文芸の「政治力」、そしてここに、この下向記や和漢聯句の史料的魅力がある。

○　この下向記は何処で、どの段階で書写されたのであろうか。例えば道中の途中とか、最後の地名である最終目的地の駿府とか考えられるが、やはり帰国して和泉国の貝塚、または中庄でまとめたと思われる。歌は途中の宿泊地などで詠まれて手控えに書き留めたものを順を追ってまとめたものであろう。そのため記憶違いもあったろう。24の桑津など記憶違いの可能性がある。

○　それにしても各地で失礼な歌・無礼な狂歌を詠んだものである。例えば24の桑津、45の五位、68の原川での狂歌など。現代と違って中世や近世初頭の地域分立の風潮の時代といえよう。人それぞれにもよろうが、例えば宗長や宗牧など旅慣れた連歌師たちの紀行には見えない歌や句といえよう。

注

(1)　織豊期、土豪の一門として和泉国南郡から日根郡北部を支配した新川氏は近世にも在地代官となって勢力を保ち、一門には、本稿で取り上げる中庄を根拠にした中庄新川氏、瓦屋(泉佐野市下瓦屋)を根拠にした佐野川新川氏(佐野川は瓦屋の南を流れる)、貝塚寺内町を支配した卜半家の支流である貝塚新川氏などがいるので、地名を冠して、例えば「中庄新川氏」「中庄新川家文書」のように明記する。

(2)　現在新川家文書は非公開であるが、大阪府泉佐野市の歴史館いずみさのに『泉佐野市史』編纂のため撮影された主要な文書があり、問い合わせれば写真版を閲覧することが可能である。

(3)　ほかに「中庄新川家文書」の研究成果は『新修泉佐野市史』第一巻 通史編 清文堂出版 平20 に見られる。

(4)　吉井克信「貝塚寺内・願泉寺の由緒をめぐって」『論集 仏教土着』法蔵館 平15

(5)　広田浩治「史料紹介 新川盛政あて沢庵宗彭等書状」泉佐野の歴史と今を知る会『会報』三三二号 平27・8

(6)　この相論や寺内町については、福尾猛市郎「近世寺内町の性質―特に和泉国貝塚寺内町について―」『紀元二千六百年記念史学論文集』、福尾猛市郎「封建再編成期における集落自治の一様相とその変貌について―主として和泉貝塚寺内をめぐる考察―」『史学研究』58 広島史学研究会 昭30、中部よし子『近世都市の成立と構造』新生社 昭42、藤本篤「近世寺内町の存立―和泉貝塚寺内地頭卜半氏の守成について―」『横田健一先生還暦記念日本史論叢』昭51、近藤孝敏「貝塚寺内の成立過程について―「貝塚寺内基立書」史料批判を通じて―」『寺内町の研究』第三巻 法蔵館 平成10、などの諸研究がある。

(7)　『貝塚市史』三　史料 昭33による。

(8)　和泉文化研究会『和泉志』二二 昭36・6

(9)　三浦圭一『中世民衆生活史の研究』思文閣出版 昭56、小山靖憲『中世寺社と荘園制』塙書房 平10

(10)　例えば矢田俊文『地震と中世の流通』高志書院 平22、同「地震直前の民衆の生活」(鶴崎編『地域文化の歴史を往く―古代・中世から近世へ―』和泉書院刊 平24)、同『中世の巨大地震』吉川弘文館 平27

(11)　鶴崎裕雄「秀吉と木食応其―連歌作品の史料的価値について―」関西大学 津田秀夫先生古稀記念会『封建社会と近代』昭64(平元)